

Title	第1回日本文化研究会『『近代日本精神史の位相 キリスト教をめぐる思索と経験』合評・討論会』報告（2015年度 聖学院大学総合研究所 日本文化研究会 主催）
Author(s)	島田, 由紀
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.1, 2015.9 :47-48
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5416
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2015年度 聖学院大学総合研究所 日本文化研究会 主催

第1回日本文化研究会

『近代日本精神史の位相 キリスト教をめぐる思索と経験』合評・討論会」報告



島田由紀先生（上段左）、村松晋先生（上段中央）、清水均先生（上段右）

2015年6月19日（金）聖学院新館集会室（駒込）において、今年度の第1回日本文化研究会として、人文学部日本文化学科教授村松晋先生の『近代日本精神史の位相-キリスト教をめぐる思索と経験』（聖学院大学出版会、2014年）の合評会が行われた。参加者は10名であった。

村松先生はご著書において、井上良雄や吉満義彦ら日本を代表するプロテスタント・カトリック思想家から、波多野精一や南原繁などキリスト教の影響を強く受けた知識人、さらには無名の教師など、昭和の前半を中心に様々な分野に生きた人々を取り上げ、キリスト教と関わる彼らの思索を丁寧に跡づける。近代およびキリスト教の受容とそこに生じる葛藤とを描き出すとともに、それぞれの人物がキリスト教信仰に基づいてどのような世界を志向したのか、意欲的に解明を試みられている。扱われる人物やアプローチが多岐にわたるため、合評会では2名が章を分担して発題した。そのため、ご著書全体に通底する村松先生の意図に本格的に迫るにはやや不足であったかもしれな

い。しかし、いくつかの章に集中した分、丁寧に村松先生の読み解きと向き合うことができた。

一人目の発題者、日本文化学科教授清水均先生は、「第二章 南原繁と坂口安吾-『墮罪論』が問いかける世界」および「第三章 松田智雄の思想-歴史とプロテスタンティズム」を担当された。清水先生は村松先生の論考に寄り添いながらいくつかの疑問を投げかけられたが、両先生のやり取りを通じて、敗戦後の政治的・社会的・思想的大地殻変動の時期にキリスト教を軸に新しい社会像を求めた人々にアプローチする際に重要となる点、つまり彼らの思想のなかの天皇制やマルクス主義の問題が、改めて明らかにされたように思う。

二人目の発題者、欧米文化学科島田由紀は、「第八章 吉満義彦の『近代批判』」「第九章 吉満義彦の人間観-『近代の超克』と〈ヒューマニズム〉」「第十章 時代の中の吉満義彦」を担当した。これら三章は吉満の強靱な思惟に正面から取り組みその骨太の構造を解き明かす圧巻のものであった。吉満は太平洋戦争前夜また最中に若い学生たちと密に向き合いつつ、同時代の異常性を一時のものとしてではなく、デカルト・ルター以来の思惟する主体を中心とした近代的思考の行き着く先として見るという。さらに、吉満は、たんなる時代批判を超えて新トマス主義の伝統に立ちつつ、神の本質を中心に据えた世界観を提示する。その神の本質とは、「謙虚」において「他者を意志」し「他者に自らの善の類似を分かち」というものであった。吉満の思考を内在的に読み解かれた重厚な論考である。今後、吉満の師である岩下壮一思想との関連など、全世界に神学的・哲学的な影響を与えた新トマス主義の伝統のなかでの吉満の思想の位置づけについて、村松先生の読み解きをさらに学びたいと心から願っている。

発題と村松先生からの応答に多くの時間が取られてしまったために、ほかの出席者のかたがたからの質疑応答の時間がごく限られてしまったこと

が、申し訳なくまた残念であった。村松先生からは今後のご研究に向けての力強いお言葉があった。また学ばせていただける機会があるものと心待ちにしている。

(文責：島田由紀 [しまだ・ゆき] 聖学院大学人文学部欧米文化学科准教授)